〔古事記傳九〕味物は多米都母能と訓べし、中卷明宮段の末に、種々之珍味とあるも、如此よむべし、其故は、貞觀儀式大嘗祭儀に、辨大夫入自儀鸞門就版跪奏兩國所獻多米都物色目、（次第にもかくあり、兩國は、悠紀主基兩國を云）と有て、其詞に、御酒倉代缶物、多米都物雜菓子飯などの色目見え、又大多米津酒、大多米酒、波多米御酒、多毎米、大多米院と見え、延喜式にも、多明米、多明酒屋、多明料理屋など、見えたればなり、（但如此く大嘗祭の所にのみ多く出て、他には一ッも見えれば、彼祭に供神物に限れる名目かとも聞ゆれど、さに非ず、古に凡て美味飲食を云る名なり、凡て上代の事は、物名も何も神事にのこれる例なれば、此名目もたまく大嘗にのみのこれるなり、）姓氏錄多米連條に、成務天皇御世仕奉炊職、賜多米連也、又多米宿禰條に、成務天皇御世、仕奉大炊寮、御飯香美、特賜嘉名、とあるを以て知るべし、（供神物に限らざること、此にて明けし、書紀の甜酒も、本の訓は多米邪祁なりけむを、後人のさかしらに、字音と心得て、多武とはよみなしつらむ、）

〔厨事類記一〕春宮御方

晝御膳（中略）或記云（中略）三御盤　進物所御菜窪器一坏　平盛五坏（皆供珍美中略）

六御盤　御厨子所御菜高盛七坏　平盛一坏　空土器一口（是又珍味中略）

供膳次第如常儀、只供珍美異例也、

〔北山抄三拾遺雜抄〕新任饗

承平七年正月十日、太政大臣（藤原忠平）家饗、御齋會中、用陸海珍味、同常、

〔喫茶往來〕昨日茶會無光臨之條、無念之至、恐恨不少、滿座之鬱望多端、御故障何事、抑彼會所爲體、內客殿懸珠簾、前大庭鋪玉沙、軒牽幕、窗垂帷、好士漸來、會衆既集之後、初水織酒三獻、次索麵茶一返、然後以山海珍物勸飯、以林園美菓甘哺、

〔狗猶集五秋〕紅葉鮒

山海の珍物なれや紅葉ぶな

〔伊呂波字類抄知字疊〕珍膳

貞德